



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第22主日 C年(2022年8月28日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：シラ書 3章17－18、20、28－29節

第二朗読：ヘブライ人への手紙 12章18－19、22－24a節

福音朗読：ルカによる福音書 14章1、7－14節

## 神の基準

第一朗読の17節にある「<sup>にゆうわ</sup>柔和」という言葉に<sup>と</sup>こころを留めてください。『シラ書』はギリシア語で記されたものが残っていますが、「<sup>のこ</sup>柔和」はギリシア語でプラユテースです。この単語は『シラ書』では5回使われています。45章4節では「<sup>あらわ</sup>信仰」を表すピスティスと<sup>いっしょ</sup>一緒に使われていますし、36章28節では「<sup>あわれ</sup>憐れみ<sup>ぶか</sup>深い」を意味する<sup>けいようし</sup>形容詞エレオスと共に使われます。さらには4章8節になると形容詞エイレーニコスと一緒に登場します。これは「<sup>せな</sup>平和的な」という意味の言葉です。プラユテースの元々の意味は「<sup>てきおう</sup>他人の弱さに適応できる強さを<sup>そな</sup>備えた柔和さ」だそうですが、『シラ書』での使われ方を見ていると、「<sup>かき</sup>信仰」、「<sup>かき</sup>憐れみ」、「<sup>かき</sup>平和」という言葉と重ね合わせて使いますので、「<sup>かき</sup>柔和」は「<sup>かき</sup>柔和」でも神さまへの<sup>もと</sup>信仰に基づく「<sup>かき</sup>憐れみ」深さと「<sup>かき</sup>平和」な心を合わせ持つ「<sup>かき</sup>柔和」の意味となるでしょう。

日本語では「<sup>かき</sup>柔和」を辞書で引いてみると「<sup>たいど</sup>性質や態度が、ものやわらかであること。また、そのありさま」という意味で、<sup>ものごし</sup>物腰の<sup>やわ</sup>柔らかさを指します。しかし、<sup>の</sup>聖書では上に述べたように神さまとの<sup>かか</sup>関わりを<sup>きそ</sup>基礎にして生まれる「<sup>かき</sup>憐れみ」深い態度、あるいは「<sup>かき</sup>平和」なあり方を指すのです。こういった「<sup>かき</sup>柔和」(プラユテース)は、神さまとの関わり<sup>の</sup>の態度である「<sup>かき</sup>へりくだり」と関係します。

第二朗読は『ヘブライ人への手紙』がずっと<sup>よ</sup>読まれてきました。今週が最後となります。『ヘブライ人への手紙』4章16節では「だから、<sup>かき</sup>憐れみを受け、<sup>かき</sup>恵みにあずかって、<sup>じぎ</sup>時宜に<sup>たす</sup>かなった助けをいただくために、<sup>だいたん</sup>大胆に<sup>かき</sup>恵みの座に近づこうではありませんか」との呼びかけがありました。そして、大祭司である主イエス・キリストの<sup>すがた</sup>姿と<sup>かた</sup>わざが語られてきました。その語りかけの最後で主イエス・キリストが<sup>まね</sup>招いていることが記されています。そこが今日の第二朗読の<sup>かしょ</sup>箇所です。12章22節で「しかし、あなたがたが近づいたのは、シオンの山、生ける神の都、天のエルサレム、無数の天使たちの祝いの集まり」とありますから、「近づこうではありませんか」と呼びかけられて、大祭司キリストのことを教えていただいて、わたしたちは「<sup>かき</sup>近づいた」のです。わたしたちが「<sup>かき</sup>近づいた」のは「<sup>かき</sup>新しい契約の

仲介者イエス」に他ならないのです。

福音朗読では、今日もイエスさまがエルサレムへと向かう旅をなさっています。この長い旅(9章51節から19章27節)の中で、イエスさまはお弟子さんたちの教育をしながら、さらには人々に神の国を伝えながら進んでいきます。その一方で当時の支配者階級であるファリサイ派や律法学者、会堂長らと対立を深めていきます。

イエスさまはファリサイ派の人々から招待を受けて食事の席に着きますが、清めのことをきっかけにファリサイ派と律法学者と対立し、彼らはイエスさまの言葉じりをつかまえようとします(11章37-54節)。またイエスさまは安息日のあり方をめぐって会堂長と対立します(13章10-17節)。今日の福音朗読はある安息日にファリサイ派の議員の家にイエスさまが招かれた時の話です。

11節にある「へりくだる」に注目してください。ギリシア語でタペイノオーと言います。意味は単純に「高いものを低くする」ですが、そこからこのありよう、あるいは生きる態度の意味が生まれていきました。「低さ」は無力さ、貧しさ、卑しさを意味するネガティブな表現ですが、新約聖書ではイエスさま自身が「へりくだって」十字架につけられましたし、「自分を低くして」子どものようになる人が天の国ではいちばん偉大な人になります。

11節では「低くされ」とあります。フランシスコ会訳は「下げられ」です。このように受動態で記されているのは、神さまが低くしてくださるという意味です。少し難しい表現で神的受動態と言います。神さまの介入と考えたらよいでしょう。「へりくだる者」(フランシスコ会訳は「自らへりくだる者」)は能動態です。神さまの想いを優先した人は、神さまの前で自分から低くなって、神さまに従って生きようになるのです。

## 【ちょっとひと言】

今日の福音朗読をどのように受け取ったらよいのでしょうか。7節から11節と、12節から14節の二つのたとえ話があります。たとえ話ですから道徳的な規則のように受け取るのはあまりふさわしい読み方だとは思えません。招かれたら末席に座らなければならない。宴会にはお返しのできない人々を招かねばならないと「～しなければならない」と考えてしまうと、福音が少し窮屈になってしまいます。

だからといって、たとえ話なのだから霊的な意味だけを引き出そうとして読むのも極端ではないかと思えます。神の国で「面目を施すことになる」ように振る舞わなければならないと考えるのは、少し行きすぎのような読み方ではないかと思えます。

上で神的受動態について書きました。神的受動態というのは文法的には受動態の形を取っていますが、その行為をするのは神さまご自身だというものです。「低くされる」(11節)の低くしてくださるのは神さまご自身なのです。福音朗読の最後の言葉は「あなたは報われる」(14節)ですが、直訳ですと「報われるだろう」となります。報いてくださるのは神さまご自身です。お返しを期待せずに貧しい人々を宴席に招きますが、それで幸せになるかどうかは神さまがお決めになることなのです。「低くなる」、「報いがある」と人間が勝手に期待してはならないのでしょうか。